

菊川町埋蔵文化財調査報告書第38集

すぎ や
杉の谷遺跡発掘調査報告書

— 範囲確認調査 —

1996

静岡県菊川町教育委員会
静岡県中遠農林事務所

菊川町埋蔵文化財調査報告書第38集

すぎの^や谷遺跡発掘調査報告書

— 範囲確認調査 —

1996

静岡県菊川町教育委員会
静岡県中遠農林事務所

例 言

1. 本書は、平成8年2月29日から3月14日にかけて実施した静岡県菊川町神尾・横地地内に所在する、杉の谷遺跡の確認調査の報告書である。
2. 調査を行うに至った原因は、周知の遺跡内において圃場整備事業が計画されたためである。調査に要した費用は、静岡県中遠農林事務所が負担した。
3. 発掘調査は、菊川町教育委員会が静岡県中遠農林事務所より委託を請け調査を実施した。

調査主体 菊川町教育委員会
調査員 塚本和弘（菊川町教育委員会）
作業員 杉山花江 黒田文江 杉田孝枝 堀内初代 杉田くめ
福井京子 栗田敏子 戸田和子 丸尾安代 三ツ井しの
伊藤初恵 井指秋雄 高岡三郎 米山良司 長谷山寅男
内藤清松 杉山清一 宮城芳雄 杉山庄市 山川加知夫
服部喜三郎

整理作業 堀内初代 三ツ井しの 萩原紀江

4. 本書の執筆及び編集は、塚本和弘が行なった。
5. 遺物整理および実測図・挿図作成は原廣志、堀内初代の協力を得た。
6. 遺構・遺物写真は、塚本が撮影した。
7. 本調査および本書刊行に関する事務は、菊川町教育委員会生涯学習課が行なった。

菊川町教育委員会 教育長 鈴木 静 夫
生涯学習課 局長兼課長 横山 守 孝
文化振興係 係 長 石川 睦 美
文化財 担 当 塚本 和 弘

8. 実測図・写真および出土遺物は、菊川町教育委員会が保管している。

目 次

第Ⅰ章 はじめに	1
第Ⅱ章 位置と環境	2
第Ⅲ章 調査の概要	4
第1節 調査の方法	
第2節 層 位	
第3節 遺 物	
第Ⅳ章 ま と め	15

挿 図 目 次

第1図 位置図（1：2,500）	1
第2図 遺跡の位置と周辺遺跡（1：10,000）	2
第3図 A地区調査区	5
第4図 A地区土層柱状図1	6
第5図 A地区土層柱状図2	7
第6図 B地区調査区	8
第7図 B地区土層柱状図	9
第8図 C地区調査区	10
第9図 C地区土層柱状図	11
第10図 出土遺物	13

挿 表 目 次

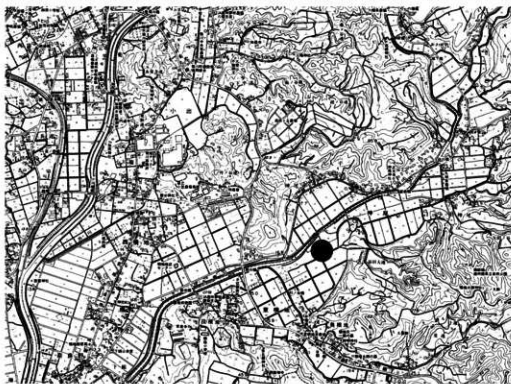
第1表 グリット一覧表	14
-------------------	----

図 版 目 次

- 図版1 出土遺物 作業風景 グリット完掘A1～3
図版2 グリット完掘A4～A11
図版3 グリット完掘A12～A19
図版4 グリット完掘A20～A27
図版5 グリット完掘A28～A35
図版6 グリット完掘A36～A43
図版7 グリット完掘A44～A47、B1～B4
図版8 グリット完掘B5～B12
図版9 グリット完掘B13～B20
図版10 グリット完掘B21～B28
図版11 グリット完掘B29～B33、C1～C3
図版12 グリット完掘C4～C11
図版13 グリット完掘C12～C19

第I章 はじめに

神尾・東横地地区は、牧之原台地から延びる丘陵地を茶の栽培と牛瀨川によって形成された肥沃な沖積平野による稲作・レタス栽培が行われている農村地帯である。近年、この地域は周辺の工業化によって交通量の増加による道路の整備や宅地化などの生活環境の問題が生じ、さらに農業構造の変化など農村地帯をとりまく環境は高度成長期以来変貌を遂げている。このような状況下、活力に満ちた水田農業と快適で便利な農村らしい居住環境づくりをめざして、水田の圃場整備、これと一体的に新規宅地や集落道路やコミュニティーセンターなどの生活環境整備を進めることを目的に平成7年度より神尾・東横地地区県営農村活性化住環境整備事業が行われることとなった。この事業では、農業生産基盤整備としての圃場整備、生活環境基盤整備としての道路・排水路・宅地の整備、環境施設整備としての公園・公流施設の設置などの基本構想からなりたっている。その内、圃場整備では26.6haを対象として100m×30mに耕地を区画整備するものである。平成8年7月24日付け中遠農整第67号で、静岡県中遠農林事務所より菊川町教育委員会に神尾・東横地地区県営農村活性化住環境整備事業における文化財の所在の有無の照会が提出された。計画内には、横地城跡をはじめ多数の文化財が所在するため同年8月4日付け菊教第415号で文化財の所在について回答を行っ

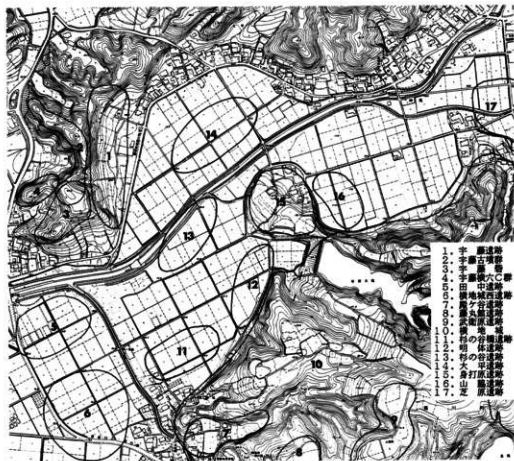


第1図 位置図

た。同年8月30日に静岡県教育委員会・菊川町教育委員会・静岡県農地整備課・静岡県中遠農林事務所・菊川町土地改良課の4者で文化財の取り扱いについて協議がもたれた。その結果、圃場整備計画内に分布する遺跡について早急に範囲と性格を把握することを目的に範囲確認調査を行う必要が生じた。これに伴い、平成8年2月29日より3月14日にかけて範囲確認調査を実施する事となった。なお、事業計画内には周知の遺跡が多く分布しているため混乱をさけるため事業名として杉の谷遺跡発掘調査と呼ぶことにした。

第Ⅱ章 位置と環境（第2図）

杉の谷遺跡は、JR菊川駅より南へ約4kmに位置する。遺跡は、牛瀨川によって形成された沖積平野に立地し現況は水田となっている。この沖積平野は、北側の神尾原



第2図 遺跡の位置と周辺遺跡

丘陵、南側の杉の谷原丘陵に挟まれた狭隘な平野である。

牛瀧川は、一級河川で牛瀧北部の牧之原台地より源を発し、牛瀧地区の長者原から小沢へ南流し神尾住川橋付近で支線と合流し流れを西にかえ遺跡の所在する少し北を南下する。その後、横地地区を横断し町境の小笠町平川法華橋付近で大きく南に流れを変えて遠州灘へと流れる。川は、改修以前は蛇行し、しばしば氾濫を繰り返し神尾地区の水田地帯に大きな被害を与えてきた。沖積地の一部には、砂利層が幾重にも重なった状態での堆積が遺跡の調査によって観察されている。牛瀧川の地形は、牛瀧川の流路変遷によって旧河道がいくえにも走り、それに伴い高地や後背湿地も複雑に入り組んで形成されている。遺跡の多くは、これらの微高地に分布し、当遺跡もその一つである。

牛瀧川流域における遺跡地図の分布状況を見ると、この地域に人が住み始めたのは、縄文時代で宇藤遺跡（1）など地形的にもやや小高い丘陵上にも認められる。宇藤遺跡では、共立総合菊川病院の建設に伴い調査された際中期の住居跡が確認されている。後期から晩期にかけての身打原遺跡（15）が所在するがその性格は調査されていないため明らかでないが集落跡と考えられる。この地域は、比較的縄文時代の遺跡の分布は少ない。縄文時代晩期以降、弥生時代中期まで遺跡の分布は確認されていない。弥生時代後期には、宇藤遺跡のように低丘陵部に集落が形成される。古墳時代後期になると集落跡は確認されていないが、宇藤古墳群（2）がある。この古墳群は、横地側の斜面に横穴群と尾根に高塚古墳群からなる。この時期以降、丘陵での生活の直接的舞台から離れ立地的条件は沖積平野へと移行すると思われる。

沖積平野に人々が生活の場として現れるのは奈良時代頃と考えられる。この時期の遺跡は、室町時代にかけての複合遺跡となっており、杉の谷遺跡（13）をはじめ大平遺跡（14）や杉の谷橋遺跡（11）などが分布している。この地域が生活の場として最も栄えたのは、鎌倉時代から室町時代でちょうど鎌倉御家人横地氏が当地の地頭として君臨した時期にあたる。この横地氏は、遠江でも有力な土豪で15世紀に今川氏に滅ぼされるまで横地を中心に勢力を拡大し政治経済に強い影響力をもっていた。この横地氏に関連する遺跡は、横地城（10）をはじめ宇藤砦（3）、殿ヶ谷遺跡（7）、横地城西遺跡（6）、藤丸館遺跡（8）、武衛原遺跡（9）や沖積地の遺跡もその時期のものである。横地氏が滅んだ以降比較的遺跡は少なく江戸時代には旗本領として当地区が小分割され政治経済の主導権を失っていった。中世の時期の面影は薄く、横地氏と共に歴史上表舞台から姿を消すこととなった。

今回の杉の谷遺跡の発掘調査では奈良時代から中近世にかけての遺物が検出されており、遺跡の性格を検討する上で重要であり、今後この地域の歴史解明の資料を提供していると言えよう。

第三章 調査の概要

第1節 調査の方法

調査は、圃場整備事業計画33.4haを対象面積とした。調査面積が広く混乱をさけるため、横地地区と神尾を二地区の三地区に分けて行った。横地地区は、杉の谷から横地にかけての13.6haでA地区とした。神尾の大平地区の10.1haをB地区とした。さらに神尾の山脇地区の9.7haをC地区とした。各地区ごとに、1m×1mのグリットを設定した。各グリット名は、地番の小さい数字より1、2、3と呼ぶことにした。調査方法は、機械と人力によって表土並びに耕作土を除去後、基盤層まで人力で発掘した。断面を精査し、遺構と遺物包含層の検出に努めた。そして、断面の計測と完掘写真撮影を行った。現地の作成図は、基本的に20分の1の縮尺を原則として必要に応じ10分の1の縮尺で行なった。基準測量については、県道川上菊川線の歩道に設置された3級基準点A-H115（16.241m）から移動して定めた。調査に伴う写真撮影には、6×7版カメラ（白黒フィルム）と2台の35mm版カメラ（白黒及びリバーサルフィルム）を使用した。掘削については、季節的に耕作する時期にあたりトラクターが沈まないように掘削範囲は極力最小限に留めた。埋め戻しについても、土が変わらないように土層に従って順に数cmづつ転圧しながら埋め戻しを行った。

第2節 土層

調査範囲が広く、土層については地区によって堆積状態や水位の高さによって色調に変化が見られたり幾重にも重なった複雑な層もあったが、基本的な土層については以下のとおりである。

- 1層 耕作及び表土層で、盛土もこの層の範囲とした。
- 2層 灰色砂質土は、水田の耕作土と同一層で中世の遺物を含んでいる。
- 3層 暗灰褐色砂質土で、炭化物や植物など混ざりがあり絞りの無い土となっている。また、遺物包含層ともなっている。
- 4層 基盤の灰茶褐色砂質土である。上面では中世の生活面となっている。
- 5層 灰青色粘質土は、シルト層で混ざりのない土である。
- 6層 河川の氾濫によって堆積した少し小粒な川砂である。
- 7層 この層は粘質の強い土で暗灰青色となっている。神尾地区のB地区からA地区の杉の谷にかけて分布する。
- 8層 茶色砂質土である。4層と土質的には変化がなく水位の関係で色調が変化している部分もある。
- 9層 丘陵に形成された黒土の流れ込みによる灰黒色粘質土である。
- 10層 暗灰色粘質土は、9層に近い土層で粘質が強い。

A地区（第3～5図） この地区は、牛湊川と奥横地川の間でグリット47箇所を設定し調査を行った。調査の結果、この地区は大きく三地点に分けることができる。

1. 杉の谷地点 グリット1～6・17～22・30～38・42の範囲で、4層の基盤層が安定した微高地となっている。遺物は、山茶碗をはじめ奈良時代の遺物が出土している。

2. 杉の谷橋地点 奥横地川の改修によって地形が変化しグリット10・12・15・16は、6層が顕著に見られ旧河川敷であろう。グリット13からグリット11にかけて、4層が見られるほか、遺物も多く出土している。この範囲が遺跡の可能性が高い。

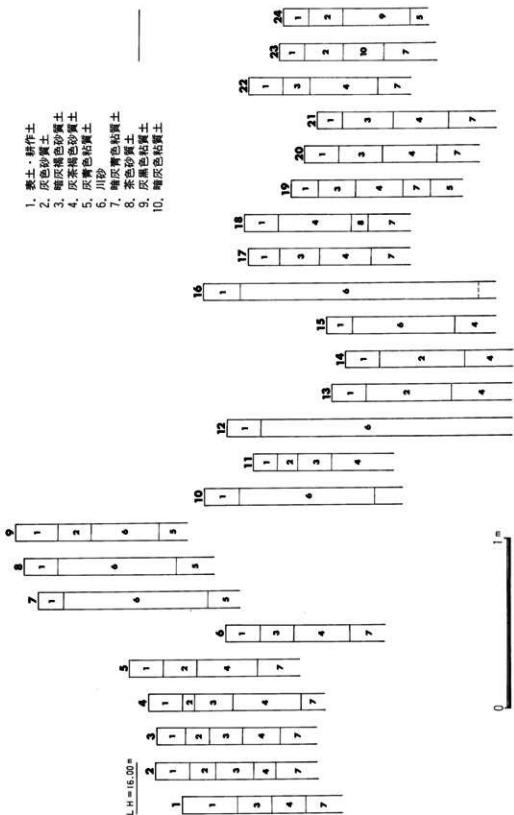
3. 明体地点 グリット39～41・46・47の範囲である。グリット39は、標高が高くグリット40・41と西へ行くに従って地形が低くなる。包含層は、グリット47以外は部分的に広がりが見られる。遺物は、グリット39よりまとまって出土している。

以上の地点以外のグリット23～29・43～45の烏帽子、出崎、四通田、百々の地点については、水位の関係で土層観察が難しく正確な資料を得ることが出来なかった。



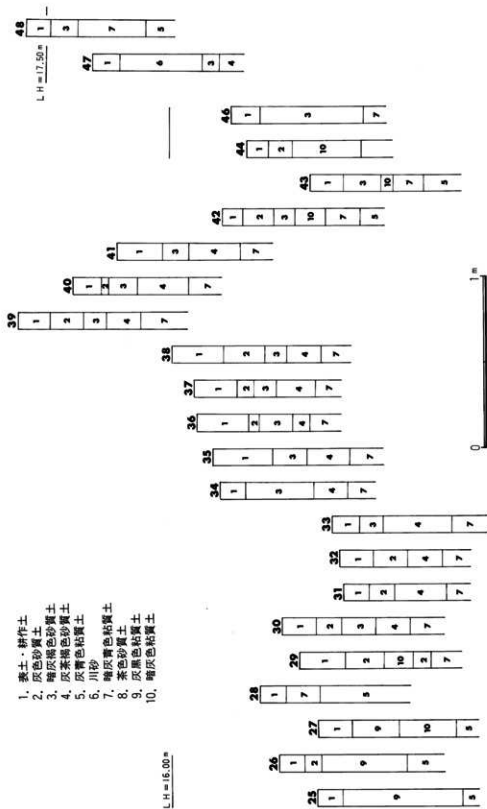
第3図 A地区調査区

1. 表土・耕作土
2. 灰色砂質土
3. 暗灰色褐色砂質土
4. 灰茶褐色砂質土
5. 灰青色粘質土
6. 川砂
7. 暗灰色粘質土
8. 暗灰色粘質土
9. 灰黑色粘質土
10. 暗灰色粘質土



第4图 A地区土层柱状图1

1. 黄土・耕作土
2. 灰色砂質土
3. 暗灰褐色砂質土
4. 灰茶褐色砂質土
5. 灰青色粘質土
6. 川砂
7. 暗灰青色粘質土
8. 茶色砂質土
9. 灰黑色粘質土
10. 暗灰色粘質土



第5图 A地区土層柱状图2

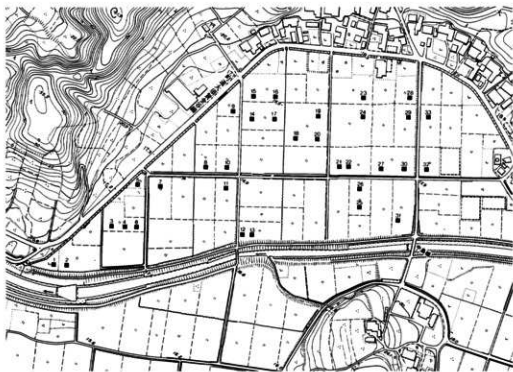
B地区（第6・7図） この地区は、牛湊川より北側の沖積地でグリット33箇所を設定した。田畑は、戦後の耕地整理によって5 aに区画され北から南に向かって傾斜している。調査の結果、地形によって三つの地点に分けることができる。

1. 森口地点 当地区の最も西側でグリット1～7の範囲であるグリット1・2は、1 m以上牛湊川の堆積によって旧地盤が埋まっている。この地区には、9層が部分的に広がりがみられ。この層は、北側に広がる丘陵部に卓越した黒ボク土の流れ込みによって形成されたものである。包含層は、グリット1・2に検出されている。遺物は各グリット内から出土している。

2. 大平地点 グリット18～23の範囲である。この地点は4層が顕著に見られ安定した堆積となっている。この地点では、牛湊川に近い地点に集中して遺物が出土している。グリット21から31・32の範囲が遺跡の中心と判断され。

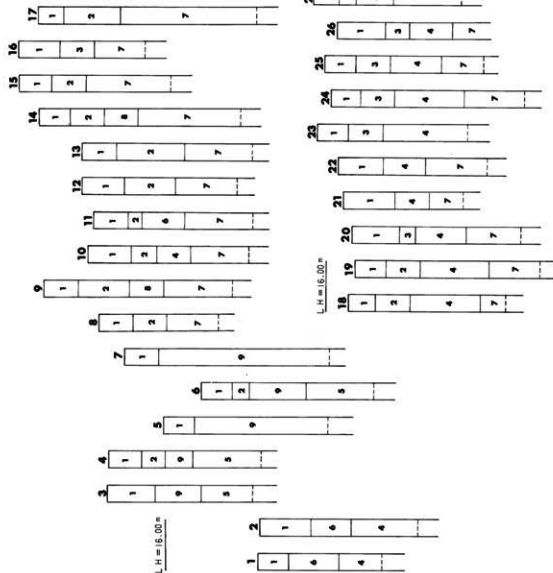
3. 神尾地点 この地点は、最も北側で集落の近くにあたりグリット8～17の範囲である。生活面となる3・4層が認められず、7層が厚く堆積している。全体に水位が高く沼状な地質となっている。周辺の丘陵部の地形から判断して、南北に谷が入り込んでいた地点と考えられる。

以上のことから3・4層が堆積している1地点のグリット1・2と2地点の一部が当時の微高地であり遺跡の可能性が高い。



第6図 B地区調査区

1. 表土・耕作土
2. 灰色砂質土
3. 暗灰褐色砂質土
4. 灰茶褐色砂質土
5. 灰青色粘質土
6. 川砂
7. 暗灰青色粘質土
8. 茶色砂質土
9. 灰黑色粘質土
10. 暗灰色粘質土



第7图 B地区土層柱状图

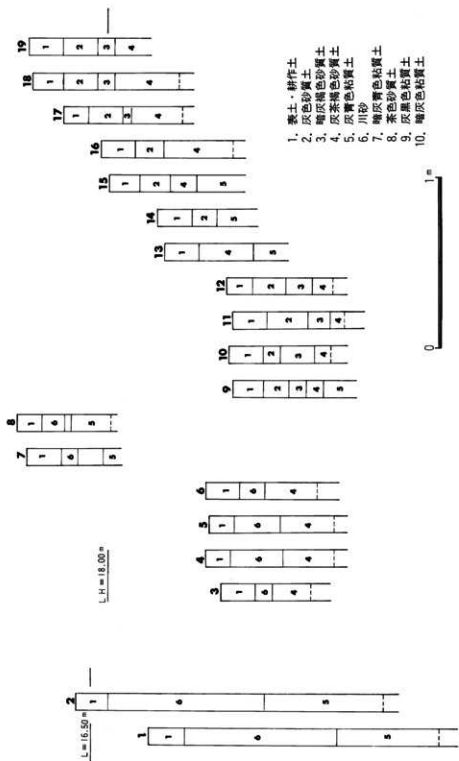
C地区（第8・9図） この地区は、牛湊川より南側で身打原と芝原の間の範囲である。調査グリットは、当初広範囲に設定する計画であったがレタス栽培の季節であったため耕作上の問題で19箇所留めた。調査の結果は、以下のとおりである。

1. グリット1・2・7・8地点は、旧河川敷にあたり川砂の堆積が数mに達する。
2. グリット3～6地点は、上層に川の氾濫による堆積と考えられる6層が見られるが、その下層に4層が安定し堆積している。また、須恵器が4層内より出土している。
3. グリット9～12の地点は、3・4層が顕著に見られる。当地点とグリット3～6地点とは4層の標高がほぼ同じ高さにあたり、両地点を結んだ地域が微高地であった可能性が強く遺跡の範囲を判断するに良好な資料と考えられる。
4. グリット17～19は、この地区では地盤が高い地点となっている。4層は、絞った土となっている。遺物は、グリット19より土器が出土している。
5. グリット13～16地点は、4層が部分的に分布する。グリット14では、シルト層が高位地点より検出され、水位も高くなっている。以上のようにグリット17～19に近い地質となるが農道を境に西側では土層に違いが認められる。

以上のことより、グリット3～9を結ぶ地点とグリット17～19の周辺には安定した4層が見られることより遺跡の所在を考えるには有力なものとなろう。しかし旧河川敷を除く他の地点については、調査資料の不足のため今後の課題となろう。



第8図 C地区調査区

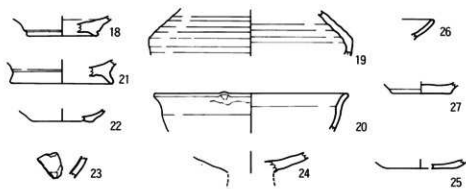
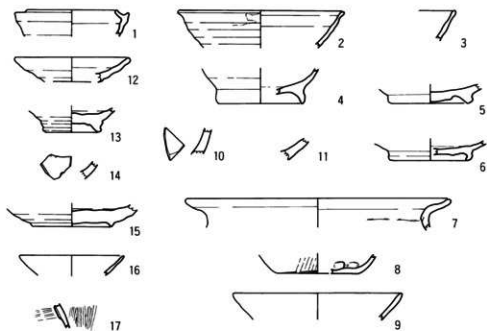


第9图 C地区土層柱状图

第3節 遺物

今回の調査で出土したのは土器で全て小破片である。土器は、須恵器・山茶碗・土師器・舶載陶磁器などがあり図示できたのは31点である。図示できなかった遺物も含めて各グリットごとに記述する。

- A-1 土師器が2点出土し、その内1点が弥生土器の可能性がある。
- A-2 奈良時代の須恵器1点、土師器の甕1点出土している。
- A-5 古墳時代後期の坏身の口縁部(1)が出土している。口径は7.0cm、最大幅9.0cmを測る。色調は灰色青で焼成は良好である。
- A-11 奈良時代から平安時代の遺物が多く出土している。図示できたのは2～9の8点である。2～6は、灰釉陶器の碗である。7～9は土師器である。7・8は甕の破片で同一個体の可能性がある。7の口径は20.6cmで、口縁部が外反するものである。胎土中に雲母を多く含む。9は、内面が黒色の皿である。
- A-12 近世のかわらけが1点出土している。
- A-17 山茶碗の体部片1点と摩滅した土師器が1点出土している。
- A-20 15世紀後半の天目茶碗(10)が出土。天目茶碗は、釉薬が鉄釉で体部下部を露胎している。
- A-23 かわらけの口縁部が出土している。
- A-30 摩滅した土師器が1点出土している。
- A-34 山茶碗の体部(11)が出土している。
- A-36 山茶碗の小片2点と近世の志戸呂1点が出土している。
- A-39 12～14の3点が出土している。12は小皿で、口径8.8cm、器高1.9cm、底部4.2cmを測る。13は、小碗の底部である。14は、施釉陶器である。
- A-41 土師器が1点出土している。
- A-45 15・16の2点が出土。15は山茶碗の破片で高台は低く三角形となる。16はかわらけの口縁部で器壁は薄く焼は良好である。鎌倉期のものである。
- A-46 奈良時代の土師器甕が出土している。
- A-47 17は奈良時代の甕の破片で内外面にハケ調整が施されている。器壁は薄く、焼成は硬い。胎土中に雲母を含む。
- B-1 12世紀後半の皿山古窯製品の小碗(18)が1点出土している。
- B-2 須恵器の壺(19)と輪花碗(20)の2点が出土している。
- B-3 山茶碗(21)の底部は、高台が丁寧な作りで11世紀前半のものと思われる。22はかわらけの底部で、ロクロ成形のものである。
- B-5 土師器が1点出土している。
- B-6 須恵器の壺の体部と山茶碗と土師器が各1点出土している。
- B-7 近世志戸呂の土器片が1点出土している。



第10圖 出土遺物

A地区(杉の谷地区)

	地番	標高	出土遺物
1	474	15.733	○
2	475	15.893	○
3	481	15.883	
4	482-1	15.933	
5	486-2	16.043	○
6	495-16	15.483	
7	501	16.583	
8	508-1	16.663	
9	509-1	16.713	
10	3901-1	15.607	
11	3902	15.323	○
12	3906-1	15.477	○
13	3911-1	14.857	
14	3912-1	14.787	
15	3914-1	14.887	
16	3920-1	15.617	
17	3928	15.347	○
18	3932	15.377	
19	3935	15.107	
20	3938	15.027	○
21	3947-1	14.947	
22	3954-1	15.353	
23	3965	15.173	○
24	3976	15.153	
25	3981	15.153	
26	3996	15.373	
27	4003	15.143	
28	4008	15.483	
29	4015	15.253	
30	4041-1	15.353	○
31	4044-1	14.993	
32	4045-1	15.013	
33	4046-1	15.053	
34	4058 西	15.713	○
35	4058 東	15.753	
36	4067	15.843	○
37	4068	15.863	
38	4069	15.993	
39	4095-1	16.887	○
40	4096-1	16.567	
41	4097-1	16.307	○
42	4102-1	15.693	
43	4110	15.177	
44	4113	15.553	
45	4115	15.643	○
46	4141	17.237	○
47	4146-1	17.617	○

B地区(大平地区)

	地番	標高	出土遺物
1	210-1	15.46	○
2	213-1	15.45	○
3	226-1 西	16.34	○
4	226-1 東	16.33	
5	228-5	16.01	○
6	230-1	15.79	○
7	237-1	16.24	○
8	250-1	16.39	
9	253-1	16.71	
10	255	16.45	
11	256	16.42	○
12	261-3 西	16.49	
13	261-3 東	16.49	
14	267-2	16.74	
15	270-1	16.86	
16	310-2	16.86	
17	312-1	16.75	
18	323-1	15.867	
19	331	15.827	
20	334-1	15.847	
21	345-1	15.897	
22	345-2	15.927	
23	354	16.047	
24	355	15.967	
25	360-1	16.007	
26	360-2	15.937	
27	369	16.077	
28	378	16.287	
29	379	16.277	
30	385-1	16.207	○
31	402-1	16.227	○
32	406	16.367	○
33	410-2	16.467	

C地区(山崎地区)

	地番	標高	出土遺物
1	516-1	16.161	
2	523-1	16.581	
3	561	17.339	○
4	564-2	17.429	○
5	566-1	17.409	
6	566-2	17.429	○
7	587-10	18.467	
8	587-11	18.527	
9	597-1	17.269	
10	598	17.289	
11	609-1	17.269	
12	609-11	17.309	
13	646-1	17.669	
14	656	17.709	
15	662-1	17.989	○
16	672	18.039	
17	681-1	18.259	
18	682-1	18.439	
19	683-2	18.459	○

第1表 グリット一覧表

- B-11 須恵器の坏類の破片が1点出土している。
- B-30 舶載陶磁器の碗(23)が出土している。
- B-31 B地区で比較的にまとまって遺物が出土している。24~27の4点が図示出来た。24・25は土師器で、24は高坏、25は内面黒色土器である。26・27は山茶碗期の小皿の破片で13世紀のものである。
- B-32 山茶碗期の小皿1点とかわらけが数点出土している。
- C-3 近世の瀬戸・美濃産の丸碗の口縁部と土師器が各1点出土している。
- C-4 須恵器の破片が出土している。
- C-6 土器が6点出土している。図示できたのは、28の須恵器の壺と29の土師器壺の底部の2点である。他は土師器である。
- C-15 30は常滑の大甕の破片である。
- C-19 山茶碗期の小皿(31)が出土している。

まとめ

今回の調査は、季節的に少し遅いため掘削範囲は最小限に留めざるおえないことやレタス栽培によって調査地点が限定されるなど決して遺跡の性格や範囲を確定するには余り良い調査とは言い難いが各地区で成果を上げることができた。各地区の説明の中で遺跡について記述したのでそれを参照にして頂きたい。全体に遺跡の範囲を検討すると、当初周知の遺跡として判断された範囲とあまり変化がないことが明らかとなった。時代については、奈良時代から室町時代のもものが主体で、一部小規模であるが弥生時代から古墳時代の遺跡が存在する可能性が秘められている。性格については、調査区が小規模であったため明確には判断できないが、A地区の杉の谷橋地点と明体地点は集落跡と考えられる。杉の谷地点では、溝状の遺構が検出しているが広範囲に広がっているため今後の検討が必要である。B地区の大平地点も杉の谷地点と同様と判断される。C地点は、今回の調査では散布地としか判断できない。

以上のように断片的なことしか明らかにすることは出来なかったが、当時の河川の流路の変遷が遺跡の所在や範囲を的確に判断する基準となろう。また、遺跡の性格を判断するには中世では、横地氏の動向を的確に把握する必要がある。なぜならば、横地氏の中心部が奥横地側とするならば、神尾はその中心を防御する北側の玄関にあたるため横地氏がどの様にこの地域を開発しムラを構成していたか、当時の歴史を解明するには重要な意義があり、この地域の遺跡の分布がそれを語る貴重な資料となるからである。古代については、中世に爆発的に開発が行われるための基盤作りとなるもので変遷を検討するには重要なものである。

おわりにあたり、本原稿をまとめるにあたって小野正敏、原廣志、齊藤慎一、山口三夫、鈴木哲太郎、宮城芳雄、福井貴義、杉山庄市の諸氏からご教示・指導を戴いた。末尾ながらここに記して深く感謝申し上げます。

杉の谷遺跡発掘調査報告書

— 範囲確認調査 —

1996年3月15日発行

編 集 静岡県菊川町教育委員会
発 行 静岡県菊川町教育委員会
印 刷 株式会社 開 明 堂

報告書抄録

書名		杉の谷遺跡発掘調査						
副書名								
巻次								
シリーズ名		菊川町埋蔵文化財報告書						
シリーズ番号		第38集						
編著者名		塚本和弘						
編集機関		菊川町教育委員会						
所在地		〒439 静岡県小笠郡菊川町堀之内61 TEL 0537-35-0925						
発行年月日		西暦 1996年3月15日						
ふりがな	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
所収遺跡名		市町村	遺跡番号					
杉の谷遺跡	小笠郡菊川町 神尾 字杉の谷	22446	186	36度 0分 42秒	141度 1分 30秒	19960229 ～ 19960314	99㎡	圃場整備 事業に伴う 確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
杉の谷遺跡	散布跡	古墳～近世		船載陶磁器 山茶碗 須恵器 かわらけ 土師器				

写 真 图 版

写真図版 1



出土遺物



作業風景



A-2



A-1



A-3

写真図版 2



A-4



A-8



A-5



A-9



A-6



A-10



A-7



A-11

写真図版 3



A-12



A-16



A-13



A-17



A-14



A-18



A-15



A-19

写真図版 4



A-20



A-24



A-21



A-25



A-22



A-26



A-23



A-27

写真図版 5



A-28



A-32



A-29



A-33



A-30



A-34



A-31



A-35

写真图版 6



A-36



A-40



A-37



A-41



A-38



A-42



A-39



A-43

写真図版 7



A-44



B-1



A-45



B-2



A-46



B-3



A-47



B-4

写真図版 8



B-5



B-9



B-6



B-10



B-7



B-11



B-8



B-12

写真図版 9



B-13



B-17



B-14



B-18



B-15



B-19



B-16



B-20

写真図版10



B-21



B-25



B-22



B-26



B-23



B-27



B-24

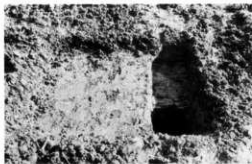


B-28

写真図版11



B-29



B-33



B-30



C-1



B-31



C-2



B-32



C-3

写真図版12



C-4



C-8



C-5



C-9



C-6



C-10



C-7



C-11

写真図版13



C-12



C-16



C-13



C-17



C-14



C-18



C-15



C-19